

# 清流

題字：芳野 充

令和6年3月30日

第87号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

## 周りの人と考えが合わないとき

家庭や職場、あるいはプライベートや様々なコミュニティのなかで、人との対面はさげられませんか。そして必要に応じて意見交換をする場面もでてきますが、スムーズに自分の意見や考えがおもあれることもあれば、どうも考えがあわずモヤモヤ、イライラする場面もあります。そのようなとき、どんな意識や考えをもつと対処しやすくなるかを、素心学塾塾長の池田繁美先生から教えていただいたことがあります。それを意識すればするほど、たしかに効果的だと実感する場面がふえてきました。

大前提は、「相手と考えがちがうのは、当たり前」ということ。そして、相手と良好な人間関係を築こう、という思いが根幹であるということです。その上で相手との関係性を頭のなかで整理します。まず、「周りの人」をわけ「対等」なのか、「主従」なのかを考へる「こと」。家庭では「妻・夫」「親・子」というつながりがあります。「妻・夫」は対等で、「親・子」は主従の関係にあります。職場では、「同僚」は対等。「上司・部下」は組織上主従の関係です。プライベートでの「友人」は対等。「先輩・後輩」は基本的に主従関係となりそうです。このようにまず、周りの人間関係を「対等」なのか「主従」なのかを整理します。

もし、意見が合わない相手が親や上司、先輩であればまずは相手を尊重します。しかし、どうしても納得のいかないことがあるのであれば、感情的にならずその理由を述べることで話がスムーズに進むことがあります。逆に相手が子や部下、後輩であれば、立場をかさにかけて頭ごなしに否定するのはなく、まず相手の意見をしっかりと受け止めること。その上で、落ち着いて意見交換することが肝要になります。

難しいのは「妻・夫」「同僚」「友人」の「対等」の関係ではないでしょうか。このときにつきぎの三つの考えを意識して話をする案外、冷静に妥協点を見つけることができる場面が増えてきたように感じています。一つ目は、自分と相手のどちらか一方をとる「択一」。二つ目は、両者の歩み寄りによる「折衷案」。三つ目は、全く新しい別の「新案」です。多くの場合、一つ目の「択一」でお互いに譲らず関係がこじれるケースが多いのではないのでしょうか。例外なくわたしもその一人です。それは、「否定されたくない」「自分が正しいと認めさせたい」という過剰にはたらく自分の意識と、自分が大切にする価値観や経験を正当化し、必要以上に絶対視する業の意識によるものだと感じています。

「自分にも相手にも、過剰にはたらく自我と業の意識がある。だから、考えが合わないのは当たり前」として、あらかじめその対処のしかたを心得ておくことがストレスを軽減し、良好な人間関係を築くために必要なことかもしれません。

加来

寛

